



天平のひろば

100 号

NPO法人平城宮跡サポートネットワーク（NPO平城宮跡）
〒 630-8577 奈良市二条町 2-9-1 奈良文化財研究所内

☎/Fax 0742-34-7713
e-mail :npoheijyou@yahoo.co.jp
http://www.heijyonet.nara.jp

「天平のひろば」100 号完成ご挨拶

NPO 平城宮跡サポートネットワーク理事長 鈴木 浩



平城宮跡が世界遺産に登録された 3 年後、平城宮跡を守り、支え、確実に後世へ伝えるためボランティア団体・平城宮跡サポートネットワークを設立しました。併せて活動を会員のみならず多方面に情報提供するため、会報

紙「天平のひろば」を刊行することになりました。創刊にあたり、石倉守三初代理事長は「定期的に発行し、宮跡を守ろうとのネットワークを育て、広めていく」と決意表明し爾来 25 年間発行し続け、今 100 号に至りました。

この折、奈良文化財研究所の町田章所長からは本会对して「会員皆様の善意の結集に感銘し、平城宮跡の活性化の起爆剤となることを期待している」との励ましの言葉を頂き、これを指針として平城宮跡の保全と歴史文化活動を展開する本会の取組みをこの会報紙を通して積極的に情報発信して参りました。

私たちは「平城宮跡を守り伝える」をモットーとしています。そのため本紙面を使い、平城宮跡の景観美化を行うクリーン大会の参加を呼び掛けるのみならず、宮跡内の様々な花鳥や昆虫たちが織りなす豊かな自然を紹介する記事を連載して、市民の関心を喚起するよう努めて参りました。また奈文研の協力による出土古代瓦や木簡、かりうちを活用した体験教室やイベント・ガイドを開催した模様を情報発信して、埋蔵文化財の価値・大切さの理解を求めてきました。この記事を読んだ学校関係者からの求めに応じて、子どもたちの現地学習や出前授業を実施したこともあり、改めて会報紙の効用を認識したものです。特に、歴史教育に資するために作成した「平城京かるた」は紙面解説の特集を組むとともに、制作元の岡村印刷工業のご厚志により奈良市などの幼稚園・小中高等学校へ贈呈し、大きな反響がありました。

これからの「天平のひろば」は、100 号刊行を一つの区切りとして、今後はデジタル化を進めて参ります。

デジタル広報誌にすると個人・地域・組織を問わず幅広い人々に平城宮跡の情報を届けることができ、大きな効果を発揮するものと考えています。

ホームページにアクセスすればすぐに閲覧することが

できますし、アーカイブとして残ることに魅力です。編集作業のスピードもアップし、印刷や配布にかかるコストを増やすことなく、情報を周知することができます。

終わりに 101 号となる 2027 年新年号は、デジタル版「天平のひろば」となりますが、今後も引き続きご愛読とご支援ご理解を賜われますようお願い申し上げます。

いつの間にか 100 号

NPO 平城宮跡広報部会長 大山達夫



「天平のひろば」は私どもの広報紙です。「天平のひろば」はいつの間にか 100 号となりました。これはひとえに皆さまのご協力の賜物とこの場をお借りして感謝申し上げます。

なんといっても、奈文研の印刷協力が無ければ 100 号は実現できなかったでしょう。改めて感謝いたします。

天平のひろばの題字は、奈文研ボランティア松内さんの実姉に揮毫していただきました。

また、マスコットは広く公募し島根県の女性が応募した瓦王（ガオー）を採用しました。

私は天平のひろばを 53 号から担当しました。100 号の約半分です。いつも思うことは「天平のひろば」は、私一人の力では完成しなかったと痛感しています。

さて、奈文研とコラボした「新天平人インタビュー」の記事は第 45 号の馬場 基さんから始めました。

また、本会の活動や行事の記録紹介は面白く、読者や市民から絶大な支持を得ています。

投稿は、文字フォント/タイトルなどの基準を示し、多くの記事が寄せられ、何を掲載するかが編集の嬉しい悩みでした。さらに紙面作成上でお叱りや苦言も、多くありましたが、12 年間必死に発行し続けたらいつの間にか 100 号達成となっていました。

最近は何のせいか編集で句読点が見にくく、修正箇所も見落としたりしています。なかなか編集が進まないのが実情です。

デジタル化が議論される時代、天平のひろばの紙媒体での編集（会報紙）は 100 号で終え編集長の交代で広報を刷新し、新たに電子媒体で情報発信する所存です。

これからは、天平のひろばを楽しみにしている皆さまに YouTube、LINE などに切り替えた新時代の広報へと発展して行くことを願っています。

これがエネルギーに満ちた皆さまとのお約束です。25 年間に難うございました。

「祝辞」記録が紡いだ100号—平城宮跡を見つめ続けた市民の力— 奈良文化財研究所所長 本中 眞



「天平のひろば」が、創刊100号を迎えられるにあたり、心よりお祝いを申し上げます。

平城宮跡は1300年の時を超えて、律令制国家の成熟の過程を雄弁に語り、往時の人々

の営みと、この地に息づく風景の記憶を静かに伝え続けてきた場所です。その価値を社会に開き、未来へとつなぐ営みは、行政だけでも、研究機関だけでも成し得ません。市民の皆さまが現場に寄り添い、継続的に活動を重ねてこられたからこそ、平城宮跡は「生きた文化財」として輝き続けてきたのです。

「天平のひろば」は、その市民活動の息づかいを丁寧に記録し、発信し続けてきました。清掃活動の様子、ガイドの工夫、イベントの舞台裏、景観保全への提案、会員の皆さまの思い——。一つひとつの記事は、平城宮跡を支える市民活動の「現場の知」を伝える貴重な記録であり、研究者にとっても、現地の変化や社会の受け止め方を知る大切な資料となっています。このような皆さまの活動の積み重ねこそが、今日の平城宮跡の風景を支え、来訪者の体験を豊かにし、地域の誇りを育む礎となってきたわけです。その歩みを記録し続けてきた会報の存在は、まさにNPO法人の活動の「記憶装置」であり、「対話の場」であったと言えるでしょう。

近年、平城宮跡を取り巻く環境は大きく変化しています。第一次大極殿院の復原整備の進展、東楼の竣工、朱雀門前広場の新たな賑わいの創出など、歴史的空間の再構築が進むなかで、文化財の価値をどのように社会に伝え、未来へと継承していくかが問われています。こうした変化のただ中で積み重ねてきた記録は、平城宮跡の“現在”を映し出す鏡であり、次の10年、20年を考えるうえで欠かせない「羅針盤」となるでしょう。

100号という節目は、過去の歩みを称えるだけでなく、未来を描く出発点でもあります。奈良文化財研究所としても、文化庁や国営公園事務所と連携しながら、皆さまとともに歩み、対話し、支え合いながら、平城宮跡の価値を次の世代へと確かに手渡していきたいと考えています。

結びに、「天平のひろば」を支えてこられたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。そして、平城宮跡を愛する多くの仲間とともに、この地の未来を育んでいけることを心から願っております。

「祝辞」

国営飛鳥歴史公園事務所所長 柳澤 秋介



NPO 平城宮跡サポートネットワークの創立25周年を迎えられ、また「天平のひろば」が100号となりましたこと、心からお喜び申し上げます。さて、私ども国営飛鳥・平城宮跡歴史公園平

城宮跡区域の事業化は平成20年のことですから、25年前の平城宮跡にはその影はありません。ということで、改めて「天平のひろば」において私どもがどのように登場してきたのか確認してみました。最初に「国交省」「公園」の字がみえるのはその事業化が行われた年、平成20年の28号で「国営公園って何だろう？」と題して事業を説明いただいております。特別史跡平城宮跡に慣れ親しまれた皆様にとって、馴染みのない奴等がやってきたけど……？という雰囲気若干感じられる？ところです。それから少し空いて、54号および55号（平成27年）では、復原事業情報館について、そのオープン及びガイドを貴法人に担っていただくことが紹介されており、現在に続く貴法人と私どもの関わりがこのときから始まったことがわかります。また56号では「宮跡展示館今秋着工」としてイメージ図とともに整備のスケジュールが紹介されており、非常に注目されていたことが窺えます。その後、59号からは、私どものほうで紙面の一部をお借りし、整備の状況等を都度ご紹介する形となっています。62号では朱雀大路・二条大路の整備について、64号では「朱雀門ひろば」等、公園のオープンについて、70号からは第一次大極殿院南門（大極門）の整備進捗状況がしばらく続き、82号に完成の報告をさせていただきました。もちろん続いて東楼の話になっていくのですが、くどいので割愛します。今後も折に触れ事業進捗状況をご報告させていただければと思っております。

今回これまでの「天平のひろば」を読み返して、平城宮跡の保全と活用の営みの中に、少しではありますが私どもの関わりを再認識しました。また何より、皆様の文章の中に様々な視点（歴史・文化、環境、来訪者……）での平城宮跡への愛を強く感じました。今後も活動が未永く継続されていかれることを祈念します。私どもとしても、今後も公園事業を通じ、我が国を代表する歴史文化遺産の保存と活用を一層図るべく取り組んで参ります。引き続きのご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

天平のひろば 100 号の思い出

NPO平城宮跡副理事長・事務局長 仁木 美津子



100号発行達成の偉業に関わった方々に敬意を表します。少しでも携わらせていただいた思い出です。NPO 平城宮跡創立 20 周年の時に天

平のひろば合本版の制作に携わらせていただきました。創刊号から 80 号までを大まかに一読し、出来る範囲で校正してもらいました。一冊の本に纏まった時、まさに NPO 平城宮跡の歴史（衣・食・住・動植物等）を学習できたと思いました。時の編集者により構成には変化がありますが、25 年間一貫した会の事業報告を見て“記録の大切さ”を実感しました。

今後も、平城宮跡を中心とした取り組みを幅広く周知、発信していただき“平城宮ファン”の益々の増加を期待しています。

「天平のひろば」創刊のころ(相談役) 伊部和徳



NPO 平城宮跡創立の夏ごろ、広報部会では、会報を発行しようということになり、私は会報名の案に「天平のひろば」

にシンボルマーク案を出し、大極殿パターンに決まりました。たまたま会員仲間の身内で書道をやっている女性が居られると聞き、会報名を揮毫してもらいました。いよいよ創刊号のプリントも出来たので、宮跡内の公開施設や周辺公民館、小学校など思いつくまま配布しました。

その頃、奈良県は、大極殿の復原記念に「平城遷都 1300 年祭」の開催を発表しました。

理事長の石倉守三さんは「会報を置いてもらえそうな所から NPO を売り込もう」と個人のでっかいワゴン車で県・市などの行政機関や警察、公民館、民間団体等に会報を配って歩きました。石倉さんは、「伊部さん！わしらは NPO の営業マンやで！」と言いながら入院するまで、一生懸命頑張ってくださいました。彼は優秀な営業マンで初代理事長に相応しい人でした。

NPO平城宮跡理事(広報部会副会長) 藤永泰雄



広報部会で『天平のひろば』の編集に関わっています。

次号から WEB での発行に切り替え、会員だけでなくより幅広く、全国の研究者や古代史ファンへの情報提供の場にしたいと思っています。「平城京歴史講座」で講演させていただき良い思い出になりました。

これがきっかけで県内外の研究機関に平城京歴史講座の講師派遣依頼も担当しています。考古学は知らないことだらけでしたが、研究者の講座を聞くことで少しずつ理解できるようになりました。特に蛇行剣などで話題になった富雄丸山古墳の発掘を担当された奈良市埋蔵文化財調査センターの柴原聡一郎先生の講演は興味深く聴きました。

最初に講演をお願いしたのは京都府埋蔵文化財調査センターの福山博章先生でした。

当会の先輩会員の紹介でお会いし講演の願いが出来ました。発掘作業で真っ黒に日焼けした顔が印象的でした。その後桜井市や吉野町教育委員会から研究者の派遣をお願いしました。平城京を考えるためには難波宮の講演は欠かせないと大阪歴史博物館に講師の派遣をお願いしました。「平城京歴史講座」の実績について高く評価していただき、田中裕子先生を派遣していただきました。さらに田中先生から近つ飛鳥博物館の谷崎仁美先生を紹介いただき、11 月に講演を予定しています。また、近つ飛鳥博物館館野和己館長には、当会創立時から非常にお世話になり「平城宮跡歴史文化講座」の第 1 回の講師で強い縁を感じました。

NPO平城宮跡会員(前広報部会会長) 谷口具徳



私が当 NPO の広報活動に関わり、日々その活動に没頭していたのはもう十数年も前のこと。会報紙「天平のひろば」を当時 3、4 名の担当者が紙

面づくりに苦心していたのが、昨日のように思われます。掲載する記事のネタを集めるために、若手研究員へのインタビューを試み奈文研の研究室を訪ねたり、特別史跡平城宮跡と NPO 平城宮跡サポートネットワークの広報のために、当時、奈良町の古い町屋にあった

地域密着の放送局である「ならどっと fm」まで定期的に出向いて収録するなど得難い体験をすることもできました。

また、特筆しなければならないこととして思い出すのは、当時の広報のメンバーの中で私たちのリーダー役として、かつて全国紙の新聞社で編集の責任者をされていた方がおられたということです。

各号のたびに、掲載する記事の選定から、広報紙としての文章表現、紙面全体の構成に至るまで多くのアドバイスをいただいたことが、ありがたい記憶として思い出されます。

佐紀古墳群とともに(NPO 平城宮跡会員) 河野健二



奈良に住みたいと、数年前より東京葛飾区から一時転居。住居は緑豊かで街中のような喧噪もなく、すぐ裏側が木々に囲まれた古墳の一面です。

散歩に出ると、右方向に行けば日葉酢媛命陵・成務天皇陵・称徳天皇陵と並ん

でいて、左に行けば磐之媛命陵・コナベ古墳・ウナベ古墳があります。奈良時代この佐紀古墳群の中に離宮があり、帝が貴族とともに暑さをしのいだと思うと佐紀古墳群の魅力が増しませんか！

奈文研のYouTube「遺跡へgo 佐紀盾列古墳群前編」・梅崎佐紀子「佐紀古墳群航空レザ一測量の地を歩く」①～⑤？シリーズを参考にして、より佐紀古墳群の現状の姿・古墳のなり立ちを知って下さい。

私は植物大好き人間で、宮内庁が管理する陵の外堀に咲く睡蓮・コウホネ・カキツバタ・コケ類を観察したり、初夏には周辺に咲く山藤をいつまで見ても飽きることがありません。

平城宮跡は世界遺産として国土交通省・文化庁の手によって遺跡の復原工事、技術の継承がなされています。当初莫大な予算を使って復原工事を行う必要があるのかどうか疑問に思っていました。いざない館・大極門・情報館のガイドをしている時、国内外の人達がだんだん復原する建物に興味を持ち、出来上がるまでに何回か来たいと言う声を沢山聞きました。

バーチャルではなく、現実に見える建物の壮麗さが解ってきた今日この頃です。

NPO平城宮跡理事(文化・ガイド部会長) 相羽洋士



NPO 平城宮跡会員歴7年を振り返ってみた。加入は2019年4月1日である。2017年1月定年退職し、その後の生活を模索している中で見つけたのが奈文研の解説ボランティアで、活動を開始した。

丁度その年の3月に平城宮跡歴史公園が開園となり2019年4月に本会に加入し、公園ガイドも行うようになった。その後、2020年8月にある本会会員の方より「ガイド部会に顔を出してみないか」という甘い誘いがあり、訳もわからず出てみたのが、大きな落とし穴にはまる結果を招いてしまった。

その後、文化部会とガイド部会が合併し、文化・ガイド部会となり、2023年6月に文化・ガイド部部会長として現在に至っている。

2020年からは新型コロナウイルスが蔓延して活動が大きく制限されるようになったが、その間注力したのは従来から継続している平城宮跡歴史文化講座、遺跡見学会、木簡ツアー、拓本づくり体験など先輩諸氏が行ってきた活動を絶やすことのないようにすることで。そのような中で記憶に残るのは、新たな活動として奈文研の「かりうち(古代のボードゲーム)」普及活動に当初から協力し、2021年11月3日に開催した「第1回かりうち大会」にスタッフとして参加し、マスコミにも大きく取り上げられたことです。

また、その後も毎年の大会が盛況で、当部会としても独自に色々なところで「かりうち体験」を開催し、好評を博しています。

かりうちや拓本で参加した「天平祭」は2023年度で終了しましたが、その後の催しものにぎわいを見せ、例えば、いざない館や資料館の歴史講座も参加者が急増しています。

もう一つは、地元小学生(4年生)の郷土学習として平城宮跡内を案内することです。4年生には少し難しいのですが、担任の先生方も熱心に事前学習に取り組んでいただき、その後児童たちからいただいたガイド一人一人宛ての手紙を読むと、私たちも大きな励みとやりがいを感じています。

今後新しい取組にも挑戦し、従来にも増して、平城宮跡を訪れる人々がわくわく感を持っていただけるような活動に取り組んでいこうと思っています。

写真で見る天平のひろば 100 号



東楼から第一次極殿を臨む



大極門から第一次極殿を臨む



第一次大極殿正殿 (奈良文化財研究所提供)



東楼(左:大極門・右奥:第一次大極殿)

この他、写真で見る天平のひろばは別冊 25 周年記念誌にも掲載されています。



朱雀門全景((奈良文化財研究所提供))



もっと知りたい平城宮跡 MAP



朱雀門ひろばに集結したクリーン大会



天平のひろば編集の様子

(左奥から、河野、藤永、川島、渋谷、大山)

(編集部)

大好評

平城京 歴史講座

和田 花さん（奈良市埋文センター技術員）は8月8日121名を前に「平城京に暮らす人々がささげた祈り―発掘調査結果を中心に」と題し講演。



平城宮跡から南東2.5km程の左京七条三坊九坪で小規模な宅地や道路の遺構が発見された。北端で六条大路や東三坊坊間道路、南端で七条条間北小路などが見つかった。北側の東三坊坊間路東側溝と六条大路南側溝の合流近くの路面上では、2つの土師器甕を合わせて埋納した土器埋納土坑が見つかった。甕が合口であることから小児を埋葬した「土器棺」ではないかと考えられ、しかも「辻」は死者をあの世に送り出す場所で人々が踏むことによって死者の再生を願う思想にも関連しているのではないかとされる。さらに六条大路南側溝などからは土馬やミニチュア土器が出土した。土馬は頭が三日月形の「都城型」で土器と共に疫病除けや災いを防ぐための祭祀用と考えられる。井戸からは斎串やガラス玉も出土。井戸使用時の雨乞いや井戸の神様に祈る祭祀遺物と思われる。天平年間には飢饉や大地震、天然痘の流行など次々と災害が起こっていた。

平城京内の人々は子供の成長を疫病の予防や退散を願い、どうにか平穏に暮らしたいという思いから様々な祈りをささげていたことがわかる。残された遺物や痕跡から当時の人々の願いや思いが伝わってくるようである。（編集部）

中本 和さん（万葉文化館主任研究員）は9月12日104名を前に「古代の三月三日節会」と題し講演。



『養老雜令』では元日や上巳など7つの節日が規定されている。

上巳節会は三月三日で天皇が主催し、曲水宴、上巳祓、北極星に灯火をささげる御燈、射礼などの儀式が行われ、臣下に酒と食事がふるまわれ祿を賜った。

中国では禊祓儀礼の要素が強いが日本では遊戯的な宴が結合した。上巳とは三月の最初の巳であるが、陽の3日になり定着した。隋・唐は曲水宴も行われていたと思われるが射礼が中心である。日本では上巳祓が重視されず、曲水宴は伝来時期も経路も不明である。

奈良時代は天皇が出御し、貴族は曲水宴で宴に出て

祿を賜り、文人は水辺で詩を賦し絁・布を賜った。平城天皇によって一時中断されたが仁明天皇により復活した。3日の開催も厳守されなくなり3月初頭に行われるようになった。復活後も天皇が主催する節会であるが、9世紀末から摂関家が主催する節会も行われた。曲水宴は必須の行事ではなく変化している。奈良時代は詩宴として開催されたが、平安時代には御燈が中心となった時期もあった。（編集部）

片岡真純さん（正倉院事務所情報発信推進室長）は、10月10日100名を前に「奈良時代の染織文化」と題し、講演。



正倉院には染織品が約4千件伝わっている。献納宝物である袈裟、染織屏風、袋、花氈等、大仏開眼関連の舞楽装束、聖武天皇一周忌齋会用染織幡、その他、敷物、帳、税として納めた^{あしぎぬ}絁、麻布などである。

これらの繊維素材は^{はだ}絹、麻、羊毛で羊毛製の花氈は、中央アジアやモンゴル産の羊毛を使った舶来品だが平絹の^{きょうけち}絁は丹後や結城産などで、苧麻から手績みした麻布は常陸国などの国産品である。天然染料が使われ、紫は紫根、赤は茜、紅花、蘇芳、黄は^{はだ}黄蘗、刈安、青は藍で染められた。織り技法は、錦、綾、羅、紗などである。2色以上の色糸を使用して文様を織り表す錦は、豪華だが厚くて固くなるため幡や履に使われた。域と文様部分で織り方を違える綾は、光の反射が異なると文様が浮かび上がって見える。薄くて柔らかいため衣服や天蓋に使われた。経糸を絡ませて織った透け感のある羅や紗は、袈裟などに用いられた。文様染め技法は2枚一組の版木を使って凹んだ部分に染料を流し込んで板締め染めをした^{きょうけち}夾纈、溶かした蠟を使って唐草文などにした^{ろうけち}藤纈、^{こうけち}絞り染めの^{こうけち}纈纈である。代表的な品から奈良時代の染織技術の高さと多様性が窺われた。

（編集部）

次回の平城京歴史講座(いざない館)

11月14日：谷崎仁美（大阪近つ飛鳥博物館学芸員）

「考古学からみた乙巳の変」

12月12日：芝 康次郎（奈文研考古第二研究室長）

「タネがあかす平城京のくらし」

1月9日：西光慎治（明日香村文化財課課長補佐）

「演題は未定（古墳関係）」

大和の奇僧—増賀上人(917-1003)

平安時代中期、多武峰に40年近く隠棲し、後に多武峰先徳、中興の祖といわれた僧がいた。彼は高い名誉や利権を嫌い、多くの奇行譚を残した。『多武峰略記』には、10才の時に比叡山に登り、慈恵大師良源の一番弟子になったと記されている。良源はこの時まだ15才の修行中の身で、その下で増賀は懸命に修行に励んだようだ。しかし46才の時(963年)比叡山を降りて、多武峰少将・藤原高光などの勧めで多武峰に庵を結び、入滅するまで過ごした。『発心集』によると師の良源が大僧正になった折(981)、多くの高僧や弟子が居並ぶ中、異様ないで立ちで痩せた牛に乗って現れ、「名聞こそ苦しけれ、かたい(乞食)のみぞたのしけれ」と歌い、「悲しきかなわが師、悪道に入りなんとす」と言って、痛烈に平安貴族仏教批判をした。彼の振る舞いは余りに非常識で人を啓蒙することもなかったが、心ある中世人や芭蕉などは増賀の中に「まことの人」を感じていたようで、多くの説話や物語が残されている。

兼好は『徒然草』第一段で、「(名声の高い僧侶は)増賀聖の言ひけむように、名聞ぐるしく、仏の御教えにたがふらむとぞ覚ゆる。ひたふるの世捨人はなかなかあらまほしきかたもありなむ」と共感を示している。

『撰集抄』に深く傾倒していた芭蕉は、「増賀が伊勢神宮を参拝した折、私欲を捨てよという神のお告げがあったので、来ていた着物を全部脱いで門前の乞食に与え、自分は裸になって比叡山に帰った。良源の忠告に対し、名利を捨ててから僧衣は着るつもりだと言って走り去った」という説話を読んで、その精神的伝統に連なろうとし、自らを「乞食の翁」と呼んだ。『笈の小文』の旅の途中、神宮参拝の際には、

裸にはまだきさらぎの嵐かな

(きさらぎ…如月・衣更着)

と、2月に裸で修行した増賀の故事にちなんだ句を詠んでいる。増賀の歌として

いかにせむ身を浮舟の荷を重み

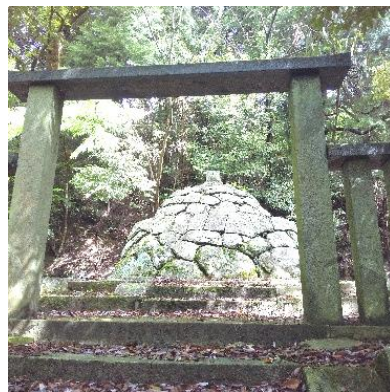
ついで
終の泊まりやいづくなるらむ

が伝わっている。彼は自分の志を实践するために奇行を重ね、現世の価値観とは全く違う世界を生きた人だったのである。だが一方、上記『略記』には、荒廃していた

多武峰の堂の改築や新造、仏像の造立、經典の研学などに尽くした事が記されている。

増賀の墓は談山神社の西門跡から山腹を20分程巡って行った念誦堀(ねずき)という所にある。石仏や石塔が並んだ先の石段を登ると石の鳥居があり、そこに半円形の石積みの墳墓が目に入る。2段積みで直径4m、高さ2m。どっしりとして周囲を圧倒する存在感がある。

余談だが上人の墓の石段下には、京都清水寺の貫主だった大西良慶師一族の墓があり、良慶師の事績を記した石碑も建立されている。(河野良子)



編集の思い出「天平のひろば」に携わって

NP0 平城宮跡会員(広報部会)

渋谷葉子



会報『天平のひろば』では、主に「新天平人」のインタビューと全体の校正、後半から「編集後記」にも携わっていました。

「新天平人」のインタビューでは、生い立ちから今に至るまでの経歴、そして現在のお仕事の内容など、幅

広く伺いました。ガイドに役立つお話や、知っている内容もっと深く掘り下げて説明していただき、その都度とても中身の濃いお話をさせていただきました。特に、若い研究員の方がご自身の研究テーマを、平城宮跡でどのように活かしているか、熱く語っていただいたことがとても印象的でした。

一方、プライベートな話題になると、お昼休みにお仲間の方とサッカーをしたり、料理がお得意だったり、意外な一面も披露してくださいました。

今までたくさんの方にインタビューをしてきましたが、このインタビューを通じてそれぞれの方の“人となり”が感じられて、大変実りの多いひとときを過ごさせていただきました。感謝でいっぱいです。

かしもと こうたろう
柏元 功太郎

(文化遺産部遺跡研究室 研究員)



1998 年大阪府柏原市生まれ。2020 年 3 月に京都大学総合人間学部卒業、2022 年 3 月同大学院人間・環境学研究科修士課程修了、同年 4 月(株)市浦ハウジング&プランニングに就き、2026 年 4 月奈文研採用、現在に至っています。

柏元さんは、中学時代に自転車で地元をめぐって感じた地域活性化への関心から、人が場所に対して抱く想いに心惹かれるようになりました。風景とは何なのかを深く考え、歴史的景勝地や街の景観が近世以降、地域社会や人々とどのように関わり、評価されてきたのかを研究しています。例えば歌枕の地である「龍田」は、斑鳩町と三郷町/柏原市の 2 つの比定地があり、両地において、文学のイメージをもとに、カエデの植樹や古今和歌集・万葉集の由緒の顕彰が行われていたとのこと。龍田の所在地と保存顕彰の実態などについて論文を執筆されています。それぞれの地での景観や人々の想いを含めて、持続的活用や整備がなされていけたらと考えています。

平城宮跡においては古代の姿を考えながら、中世近世の景観はどうだったのかを想像した上で田圃や農園を作ったりして地域の人々と関わっていけたら良いと言っていました。また、名勝東院庭園にも関心があり、復原整備だけではなく、もっと利活用に臨めるような努力をしてみたいとも話されました。

平城宮跡内では、第二次大極殿からの風景が一番気に入っているそうで、第一次大極殿の復原が進んでいるエリアとの景観と体感の違いを指摘されたのが、とても新鮮でした。9 月末から初めていざない館南側で発掘調査に携わるそうです。

また、学生時代はワンダーフォーゲル部に所属していて、休日は登山をしたり、短歌や小説を実作したりと、文学も楽しんでいと話されました。

現在は和歌山から通っているとのこと。

最後に今の人たちが関わってこそ意義があるので NP0 平城宮跡は、奈文研や地元の方たちと一緒に古代と現代をつないで宮跡の魅力を伝えていって欲しいと、明るく語られました。

(編集部)

平城宮跡を“楽しむ”人たち

かりうちゲームと拓本づくり

NP0 平城宮跡は 7 月 25 日 いざない館で、かりうちゲームと古代瓦の拓本体験イベントを行いました。

38℃ という日で心配でしたが、子ども連れが多く、夏休みの体験として熱中症警戒のなか、子供たちが、「かりうち・拓本づくり」に積極的に参加して、結果拓本 8 名、かりうち 50 名の参加がありました。

(文化・ガイド部会)



いざない館で拓本づくり(1・2)



いざない館で かりうち体験

新規会員の紹介/募集

新規会員の紹介 (10 月 1 日現在)

吉田勝彦さんが入会。

◆新規募集<活動支援/入会のお申し込み>

◆個人会員が支援/活動 年会費 3,000 円

◆法人会員が支援/活動 年会費 10,000 円

◆お申込み: ☎ & FAX 0742-34-7713

編集後記

平城宮跡はすっかり秋らしくなりました。大草原に咲く小さな花が好きです。

「天平のひろば」もお蔭さまで 100 号を校了しました。

これからは「新たな天平のひろば」のデジタル化を応援いたします。

長期間のご支援ありがとうございます。 (T/o)